
ボクと皆のバカテス日常

FOOL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクと皆のバカテス日常

【Nコード】

N5823W

【作者名】

FOOL

【あらすじ】

神の悪戯で死亡した少年。お詫びとして転生した先は、バカとテストと召喚獣の世界だった。

第0話 俺とボクと転生者（前書き）

初めてで緊張しています。

第0話 俺とボクと転生者

「ここはどこだろう？一面真っ黒な空間にいた。辺りにあるのは

.....
「すごく綺麗でボンキュボンなお姉さんだ。」

「セクハラですよ。それ？」

思わずつぶやいた言葉に頭を軽く小突かれてしまった。

「あの〜ここはどこでしょうか？」

「天国と地獄の狭間です。死者の魂はここで天国か地獄へいく判決を受ける場所です。」

「ということは俺、死んだんですか？」

「.....意外に冷静ですね？」

やや困惑しながら問いかけてきた。

「ここが普通の空間ではないことは何となくわかりましたし、車に轢かれた記憶がありますし。」車に轢かれそうになった少年を突飛ばして代わり轢かれたんだ。

「じゃあ、あなたは女神ですか？」

「申し遅れました。私はアテナと申します。」

「アテナってギリシャ神話のゼウスの娘さん？」

「はい。合ってます。」

「で、そのアテナさんが俺に用なんですか？」

俺の問いにアテナさんが言いづらそうに答えた。

「実は、あの交通事故は、私の部下が悪戯で起こしたものです。」
.....はい？

「ですから、私の部下があの子を轢こうとしたんです。」

なんだって？

「ふ…ふ…ふ…」

「ふ？」

アテナさんが首を傾げた瞬間、

「ふざっけんなぁー！！」 感情のまま叫んでいた。

「あのガキが何か悪いことでもやっただていうのか！！神だが高んだか知らないけど、やって良いこと悪いことがあるんだぞ！！」

アテナさんが悪い訳じゃないのはわかってはいるが、それでも言わずにはいられなかった。俺の咆哮にアテナさんは微笑むと俺をやさしく抱き寄せた。トクントクン。アテナさんの鼓動が興奮していた俺を落ち着かせる。

「落ち着きましたか？」

慈愛の眼差しに顔を紅く染める。

「は…はい。すいません。アテナさんが悪い訳じゃないのに怒鳴り散らしちゃって。」

「いえ。それで、こちらの不手際で亡くなったのですから、異世界に転生して戴くというのはどうでしょうか？」

「なら、『バカとテストと召喚獣』の世界でいくつか特殊能力付でできますか？」

「はい。できます。それで、どのような能力が欲しいのでしょうか？」

「瞬間記憶。高速筆記。速度は1分で400字詰め用の紙30枚にびっしり書き込めるくらいの速度で。仮面ライダーWのフィリップの能力。」

「…どれも可能です。」

「では、フィリップの能力に制限を。未来を読む事が出来ない。他にアテナさんの許可なく他人のプライバシーに関する記録は読めない。にしてもらえますか？」

「はい。わかりました。」

「それと、アイツと一緒にバカやって楽しみたいから吉井明久の幼なじみにしてください。」

「はい。わかりました。」

「最後にひとつ。あのボウズを殺そうとしたアテナさんの部下にキツイお灸を据えて欲しい。」「ご心配なく。コキユートスで永久封印刑に処される事になりました。」

そういうことなら問題ないか。アテナさんが指をはじくと少し先にドアが現れた。

「そのドアをくぐれば転生されます。赤ちゃんからですが、新しい人生（命）を楽しんでください。」

「ああ。ありがとうアテナさん。……………そうだ。あのボウズと母さんに幸せになってと伝えてくれませんか？」

「いいでしょう。必ずお伝えいたします。」

「何から何まですみません。」

そう返してからドアの先へ向かった。

第1話 ボクとアキくと迷子の女の子（前書き）

感想をくださりました、鳴神 ソラ様、光閻雪様、まあ様、及び、この小説と、一人が踏んだ失態^{ミス}を呼んでくださりました皆様ありがとうございます。

原作キャラが出ます。誰が出るかはお楽しみに。

第1話 ボクとアキくと迷子の女の子

「父さん。ちょっとアキくんちに遊びに行ってくる！」

「ああ。余り、アキくんに迷惑かけないようにな。それと、暗くならない内に帰ってくるんだぞ。」

父さんの返事に勢いよく駆け出した。

ボクが風宮家の次男として、転生して5年がたった。その間にアテナさんに頼んだ通りにアキくと友達となり、今ではほとんど毎日公園で泥だらけになるまで遊ぶ仲間となっていた。(どちらかが風邪をひいた場合は別。) 今日もアキ君と一緒に公園で泥だらけになるまで遊ぶ予定だった。

公園へ向かう途中で、泣いている女の子を見つけた。事情は良くわからないけど、泣いている女の子をほっておけずにボク達はその女の子に声をかけた。

「どうしたの？」

アキ君が優しく声をかけたらこちらを見た。その顔は、泣き顔だ。ボクの左手を女の子の目の前でひらひらさせる。『何も持っていないよ。』と言うアピールだ。そしてグッと握る。次の瞬間ボクに左手にはバラの花が現れた。

「あげる。君みたいなかわいい女の子には笑っている方がよく似合

「うん。」

「……………うん。ありがとう。」

まだ目は赤いが、それでも少女に笑顔が戻ったようだ。

「どづしたの？」

「弟とはぐれちゃったの。」

「僕達も探すの手伝うよ。僕はよいいあきひさ、こっちはかざみや
こうよう君。君と弟のお名前を教えて。」

「うん！アタシはゆうこ！おとうとはひでよしっていうの！」

ゆうこにひでよしってまさか、原作キャラか！驚いている間にア
キ君がゆうちゃんから秀吉君の服装や顔の特徴を聞き出したらしい。

「アキ君とゆうちゃんは向こう側を探して。ボクは向こう側を探し
てくる。見つからなくても1時間ぐらいしたらボクのお店に集合し
て。」

「うん！わかった！行くう！ゆうちゃん！」

ボクの声にアキ君がゆうちゃんを連れて行った。

心の中でアキ君にお礼を言いながら、『地球の本棚』に入る。キー
ワードは『Hideyoshi kinoshita』、『Whereabouts』、『Map』。思ったより離れていない場所に

いることがわかり、その場所へと向かった。

「……………すごいなほんとに。パツと見た感じ、いやじっくり見てもゆうちゃんと全く変わらないや。……………別に一卵性双生児って訳じゃないから此処まで似ている必要などないんだけどね。」

「ねえ。秀吉君で合っているよね？」

「？うむ。そうじゃがおぬしはどちらさまかの？」

突然声をかけられて、秀吉君は警戒しているようだ。

「秀吉君のお姉さんに頼まれて探してたんだ。」

「姉上に？それはわざわざかたじけないの。」

「気にしない気にしない。困っている人を見つけたら助けるのは当然のことでしょ？ボクのうちで待っていていればくるはずだよ。」

そいつってボクは秀吉君をボクのお店に連れて行った。

「あれ？モミジ。お帰り。ずいぶん早かったね。」

夏実母さんがボク達を出迎えてくれた。

「迷子の子を保護しちゃったんだ。後1時間もすればアキ君がこの子のお姉さんを連れてくるよ。」

「ああじゃ、奥に上がって。お茶とお菓子用意するから。」

奥で夏実母さん達が持つてきてくれたお菓子やお茶を飲みながら、トランプで遊んでいると、やがて、アキ君とゆうちゃんがやってきた。「ひでよし!!」

ゆうちゃんが涙を流しながら秀君を抱きしめる。

「よかった。見つかってよかった。」

「かたじけない姉上。心配かけてしまった。」

美しきかな。姉弟愛。しばらく、二人のやりとりを見つめていたが、四人で暗くなるまで、トランプで遊んだ。

「ありがとう。アキくんにごうくん。……遊びに来ていい?」

「ウン。もちろんだよ!」

ボクたちは満面の笑顔で答えた。

第2話 ボクと優ちゃんと誘拐事件（前書き）

感想をくださりました、鳴神 ソラ様、光閻雪様、まあ様、GAU様、及び、この小説を呼んでくださりました皆様ありがとうございます。

優子嬢が拉致られます。

結果がどうなるかは本文を見てください。

第2話 ボクと優ちゃんと誘拐事件

優ちゃん達と知り合いになってから数年が経ちボク達は小学校に上がった。住んでる地区の都合で別々の小学校になってしまった。その所為で、涙ぐんだボクを見て優ちゃんが、『そんな顔をしないの。学校が別々だからって放課後が別々にならなきゃいけない訳じゃないんだしね?』と何故か、鼻血を出しながら慰めてくれたのが少し怖かった。学校が終わって、帰り道で、優ちゃん達と合流して、夕方になるまで、遊ぶ時間がすごく楽しかった。あの日もそうだった。

いつものようにアキさんと一緒に優ちゃん達が使う通学路の途中で優ちゃん達を待ってたら、優ちゃんを見つけ、声をかけようとしたら、後ろから追いかけてきた男達が優ちゃんの口をふさいで無理矢理車に押し込んだ。

「モ、モミジ、これって誘拐!」

「……………アキくんはボクの家に行って父さん達に伝えて。ボクはあの車を追いかける。」

アキくんにそう言って駆け出した。

SIDE 優子

怖い！車に押し込まれた時にわかった。アタシは誘拐されたんだと。逃げ出したくても、両脇に男の人に押さえ付けられて、逃げられない。

そんな、恐怖感と無力感の中で助けを待って震えてた時

『まて！』

そんな声が聞こえた気がした。

「まて！」

今度ははっきり聞こえた。

誘拐犯にも聞こえたようでしきりに辺りを見渡している。

「おい！バックミラーになにか映ってる！」

その言葉にみんなが注目する。確かにバックミラーになにか黒い点が映ってる。それが、段々大きくなってる。

「お、おい。ガキが追いかけてる？」

戸惑った声をあげた。あれはモミジ！恐怖感さえ忘れてその少年を見つめていた。

やっと見つけた。車を追いかけて数分、ようやく追いついた。かなり速度をだしてた上、ところどころ曲がって走ってたせいで見失うたびに『地球の本棚』で探して何とか見つけた。

「さて、見つけたはいいけど、どうしよう？」

誰にともなくつぶやいた。車を見つけたはいいけど、どうするか、まったく考えてなかった。止まれと叫んだところで止まるはずがない。どうしようと悩んでたら、男が身を乗り出して、

「うわっ！」

発砲してきた。慌てて、横に跳ぶのが遅れてたら当たってた。そのせいでまた、車との距離が離れてしまった。スピードを出して距離を縮めるがその度に発砲の繰り返しだ。だが、そのいちごっこが突如終わりを告げた。男が銃を向けるのだが、発砲する様子がない。どうやら弾切れみたいだ。そう判断すると一気に距離を詰め、男が身を乗り出していた窓から飛び込んで、優ちゃんを取り押さえている男達を殴って気絶させた。運転手も殴って気絶させてから、ブレーキを踏む。

「もう、大丈夫だよ？優ちゃん。」
車が止まってから、優ちゃんに声をかけると彼女はボクに抱きついて泣き出した。

SIDE 優子

「もう、大丈夫だよ？優ちゃん。」

その言葉を聞いた時、感情が爆発したかのように涙を止める事が出来なかった。怖かった！誰も助けてくれないと不安で張り裂けそうだった。それ以上に助けてくれたのが嬉しかった。

お巡りさんが来たのを見て、モミジがアタシに聞いてきた。

「……………立てる？」

その言葉にアタシは首を振った。モミジは苦笑してアタシを抱き上げる。ってちょっと待って！これお姫様抱っこ！突然の出来事にアタシの思考は空回りを続ける。心臓だって、かなり早くドキドキ言ってるのが自分でも分かる。この瞬間、嫌でもわかってしまった。アタシはモミジに恋してるんだ。今はまだこの想いを伝える事ができない。でも、いつか伝えてみせる！

「……………アタシがモミジのものになっても構わないからモミジもアタシのになって。」

誰にも聞こえない言葉は自分でも驚くほど大きく響いた。

第2話 ボクと優ちゃんと誘拐事件（後書き）

まず最初に言います。やり過ぎてしまった感じがします。

そして、人と車のカーチェイスは書いて見たかったので満足感もします。

第3話 瑞希ちゃんと秋穂母さんと料理教室（前書き）

感想くださりました、鳴神 ソラ様、まあ様、光闇雪様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。幼少期編は今話で終了します。

第3話 瑞希ちゃんとお友達の秋穂母さんと料理教室

「ねえ。瑞希ちゃん。」

瑞希ちゃんとお友達になってしばらくしてから、ある計画を実行する事にした。原作を知ってたら想像つくかもしれないけど、料理兵器撲滅計画。

「はい。なんですか？」

「明日土日だからさ、優ちゃん達も誘って泊まり掛けで料理教室やらない？」

「え？でも……………」

瑞希ちゃんは言い淀む。

「深くは気にしないでね。みんなで料理教室って楽しくならない？」

「はい」

嬉しそうに答えた。

「そうそう。各自調味料だと思うものを持って来てね。」

「ただいま〜。」

「……お邪魔します（するぞい）。」「……授業が終わってからすぐに食材を大量に買い込み、アキくん達と合流してきた。

「おかえり〜！」

秋穂母さんがその言葉とともにボクに抱きついてきた。…ボクの家族構成を簡単にせつめ……じゃなくしてお話すると、曾祖父に曾祖母、父に母二人に母親違いの兄という構成で、秋穂母さんがボクを産んでくれた母親である。

「……………ただいま。秋穂母さん。」

頬擦りし始める秋穂母さんに若干、呆れが混じったような声をかける。

「こんにちは。秋穂さん。」

アキくんの挨拶に秋穂母さんがアキくん達に気付いたらしい。

「いらっしゃい。アキくんに秀くんに優ちゃん。それで、そちらの女の娘が瑞希ちゃんよね？」

「はい。はじめまして。姫路瑞希と言います。」
わざわざ頭を下げて挨拶する瑞希ちゃんだ。

「時間も無いし、さっさと始めよう？それじゃ、みんな。持ってきた調味料を確認させてね。」

確認の結果、アキくんは大丈夫。秀くんにも大丈夫なん

だけど、やはり、問題は瑞希ちゃんだ。砂糖や塩といった普通に聞いたら真っ先に出て来る物はないわ、多種類の劇薬が出てくるわ。これには、ボクもアキくんも秋穂母さんも戦慄した。

「うん。これは大変かもね。」

秋穂母さんが唸りながらもそう言った。

「無理そう?」

その言葉に秋穂母さんが首を横に振った。

「大変かもしれないけど、根気よく説明すれば大丈夫だよ。任せて。」

胸を反らして宣言する秋穂母さんに頼もしく感じるのだった。

SIDE 瑞希

今日1日の特訓の成果は良い方だと思う。秀吉君や優子ちゃん料理の腕が上達していると思う。でも、私だけが、大した成長してない。私が持って来た調味料が危険物だという事がわかったけどそれだけだった。そんな自分に不甲斐なく感じながら御手洗いの帰りにシャツシャツという音が聞こえた。何の音だろう?音の聞こえた方に行って見ると、秋穂さんが台所でなにかをやっているようだった。

「秋穂さん?」

その言葉に秋穂さんがこちらに振り向いた。

「ごめんね。起こしちゃった?」

「いいえ。大丈夫ですけど、何をしていたんですか?」

「包丁を研いでたんだ。」

「大変じゃないですか?」

私の問いに首を振って否定した。

「ううん。私が作った料理で大好きな人達が幸せになるってことはうれしい事だよ。」

秋穂さんの言葉になんとも言いたい事がわかった。そして、私はあるお願いをした。

SIDE紅葉

「……………美味しい。」

瑞希ちゃんの手料理を食べてそう呟いた。おかしい。確かに瑞希ちゃんの手料理は不味くはない。だけど、決して美味しいと評価出来る味じゃない。

「それに……………」

「それに、なんですか?」

ボクの声が聞こえたのか瑞希ちゃんが聞いてきた。

「いや、なんでもないよ。」

その問いに首を振って否定した。気になったのは瑞希ちゃんだ。目の下に隈を浮かべているのに、凄く生き生きした表情をしているのだ。そして、もう一人目の下に隈を浮かべている人に質問して見た。

「秋穂母さん。瑞希ちゃんに何かしたの？」

「別に 料理の基本を教えただけだよ。」

「料理の基本？」

ボクの疑問を瑞希ちゃんが答えた。

「はい 料理の基本。それは誰かを想う気持ちです。」

第3 / 5話 ボクとアキくと女装コンテスト（前書き）

思い付きで急遽書いた外伝です。その為めちゃくちゃなところがあるかもしれませんが。

第3 / 5話 ボクとアキくと女装コンテスト

「今から、コンテストに出てもらおう人を決めてください。」

文化祭の事で文化祭実行委員の人が教壇に立ち皆に言った。

「コンテストって事はミスコンですか？」

「それが、ミスコンではなく、ミスターコンテストで、しかも、女装ものです。」

「な！なんじゃ！それは！」

実行委員の言葉に騒然となる。

「ミスコンだと少し問題があるのと、女装ものだと受け狙いにできるからです。誰が出る人いませんか？他者推薦も可能です。」

へー。それじゃ、

「はい！（吉井明久）（風宮紅葉）君が良いと思います！」「」

ボクともう一人が声をあげた。って、アキくん？

「出場者は2名と言われていますから、このお二人に出てもらいますよ。」

実行委員がそう言うと皆が惜しみ無い拍手をしてくれた。

「……………と言つことがあつたんですよ。」

家に泊まりに来たアキくんが夕食時に話し出した。

「アキくんも大変だね。」

「それで。アキくん。どんな衣装が決まってるの？」

「いえ。僕もモミジも決まってるません。」

夏実さんの言葉にそう返したら、夏実さんはボクとアキくんをジロジロと見始めた。

「うーん。メイドは在り来たりだし水着は無理だし。何にしようかな？」

「あ、あの。夏実さん？」

恐る恐る問いかけるが聞こえて無いみたい。

「ウサギさん。レースクイーン。シスター。巫女さん。素材が良いからどんな格好にしようか悩むな。」

「あの夏実ちゃん。着物はどう？」

秋穂さんの言葉に何が気付いたようだ。

「ん。ああ！それがあった！ありがとう 秋穂」

「エへへ 夏実ちゃんのお役に立てて何よりだよ」

……………そして、文化祭同日つまり、僕達の恥辱ショー当日。コンテストは大にぎわいだった。女装姿の男子達がステージに上がる姿は観客は笑っていたけど次は自分達の番だと思つと笑う気にもなれない。やがて僕の番になりステージに上がるとみんなが静かになった。

「キヤー アキちゃん こっち向いてー」

秋穂さんの黄色い応援に力なく片手を降つて答えた。次にモミジの番になり、ステージに上がる。

「カツコイイ〜 モミジ」

モミジの場合は夏実さんのおかげかなれたかのように片手を振つて応えた。

出場者全員がステージに上がり、表彰される。3位の人が表彰され、2位の人がの番だ。

「2位は吉井明久君です。」

余り、嬉しくない。そう思いながら、上がるつとすると、手裏剣が飛んできた。驚いて転びそうになると、

キンツという金属音と

「大丈夫ですか！姫様！」

と若干焦って助けしてくれた袖無しの黒い和服を着たくノーのモミジがいた。

「うん。ありがとう。」

と返事を返したら、みんなから黄色い悲鳴をあげられた。

……………その日から、僕はアキ姫と、モミジは男子からのラブレターを渡される日々が続いてしまった。

第4話 アキくんと島田さんと知らない日本語（前書き）

感想くださりました、鳴神 ソラ様、光闇雪様、まあ様、LAN武様、レフェル様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

なお、活動報告にも、書きましたが、同タイトルを発見した為、タイトルを変更致します。協力してくださいました、鳴神 ソラ様、GAU様、コメントをくださりました、まあ様ありがとうございます。

第4話 アキくと島田さんと知らない日本語

「アキくん。退屈で寝そうだった。」

余りに退屈だった入学式が終わりアキくんに愚痴りながらこれから1年間お世話になる教室へと移動する。

「須川亮です。よろしくお願いします。」

亮君が自己紹介を終えて席についた。あ。次は島田さんの番だ。

「シマダ ミナミ です。よろしく お願いします。」

ボク以外のみんながびっくりしている。黒板の字間違ってるし。

「島田さんはドイツからの帰国子女で、日本に帰って来たのはつい最近です。」

その言葉にみんなが納得する。……そろそろ、助け船を出さな
きゃ。

「(島田さん。黒板の名前が間違ってるよ。)(」

ボクがドイツ語で話しかけると島田さんはすごく驚いてから黒板の字を見て、アルファベットに書き直した。

「よろしくお願いします。」

島田さんは顔を赤くして、自分の席に早足で戻った。

「神無月中学校出身、坂本雄二だ。」

坂本君が愛想の無いぶつきらぼうな自己紹介をした。

「あいつが、神無月の悪鬼羅刹。」

坂本君。君は中学時代、一体何を？

「ワシは木下秀吉じゃ。違うクラスに姉上がおるので出来れば秀吉と読んで欲しいのじゃ。よろしく頼むぞい。」

次は秀くん。相変わらず男子の制服に違和感があるね。

「……………土屋康太。趣味はとうさ……………何もない。特技はとうちよ……………特にない。」

土屋君ポケットからボイスレコーダーとカメラが見えてる。それと、土屋君盗撮と盗聴は犯罪だよ？

あ。次はボクの番だ。

「風宮紅葉です。ワザと間違えている人もいますがボクと秀くんは男です。」

ボクがそう言った途端、

「……………バカなアアア！！！！」「……………」

アキくんと秀くんと雄二君意外の男子の叫びがこたました。

え、えっと、なんでそこでみんなが驚くんだらうつか？

「ウソだろ？こんなに可愛い娘達が男だなんて。」

ちよっと？

「俺なんて、放課後に告白しようと思ったんだぞ。」

ちよっと待って！ボクは男だよ！！

「ふ。まだ甘いな。」

「キサマ！わかるか一目惚れで初恋なんだぞ！」

え、えっと、そこまでヒートアップしなくても良いんじゃないの？

「お前らあの娘達を見る！！！！首から下を女の子と取り替えても違和感無いだろ！！！！あの娘達は男のむすめ、男の娘だ！！！！どうだ！告白しても問題あるか！」

「「あるから」のじゃ（！！！！おおいに問題あるから」のじゃ（！！！！」

ボクと秀くんのツッコミはヒートアップした皆には届かなかった。

「君達。静かにして。自己紹介が進まない。」

鉄人先生の注意で静まり返る。

「長月中学出身の吉井明久です。よろしくお願いします。」

そう言って、頭を下げるアキくんをみんなは見つめるのだった。服装が玲お姉ちゃんの中学の制服だもんね。……あ。島田さんが頭を抱えている。やっぱり、このみんなと一年過ごすのが不安になったんだろう。

入学式とHRが終わり、その日は解散のため、もう帰ろうとしたのだがふと、ある事を思い出した。島田さんが皆を豚呼ばわりするんだった。まだ、日本語が不慣れな状況で孤立するのも可哀想だしね。そう思って、口を開きかけた島田さんに妨害した。

「皆静かにして。」

ドイツ語日本語両方で言って島田さん達を静かにさせる。

「みんな！島田さんは日本語に慣れてないんだから一度に喋らないでよ！」そう言って、一人一人の質問を訳して島田さんの答えを訳す。そんなことをやってたらかなり時間がたってたらしい。

「（あの、ありがとう。）」

「（気にしないで。日本語に慣れてない間はボクもフォローするから、できるだけ早く日本語に慣れてね。）」

SIDE 美波

「はあ。」ため息を吐きながら一人とぼとぼと歩いていた。学校ではカザミヤや他の皆がサポートしてくれるけど、一人の時は買い物だつてまともに来れない。そんな自己嫌悪の中

「(アレ?どうしたの?島田さん。)」

見知らぬ女性に声をかけられた。?どこかで見たような?

「(あれ?あなた誰?)」

「(わからない?風宮だけど。)」

その言葉に彼女をじろじろと見た。確かにカザミヤだ。

「(どうしたのその格好?)」

「(ここ、父さんのお店だからかえってから手伝ってるんだよ。)」
たしかに私たちが話をしている建物は何かのお店だ。

「(そつだ!島田さん。今、時間ある?)」

そつ言つて、奥に上がらせる。奥の部屋でヨシイが何かを聞きながら書き写している。

「(ヨシイは何をしているの?)」

「(アキくんはドイツ語の勉強しているよ。)」

え?その言葉を聞いて驚いた表情で彼女の顔を見た。

「(アキくんは島田さんと友達になりたくて必死にドイツ語の勉強しているよ。)」

その言葉に私は目頭から熱いものがあふれるのを止められ無かった。ここはニホンだからニホンゴを使うのが普通だ。わざわざ、ドイツ語を覚えようとする必要なんて無いはず。なのに、私の為にそんな苦勞を裂いてくれた事が嬉しかった。

「（カザミヤ。私はもう帰るけど、この辺の図書館ってまだ開いてる？）」「

「ヨシイ。」

廊下を歩いていると、ヨシイとカザミヤが居るので声をかけた。

「（島田さん。おはよう。）」「

まだ、片言だけど、ドイツ語でヨシイは挨拶した。

「あのね、ヨシイ、ワタシは、」

「え W a t a s i t t ? ゴメン。何か怒らせちゃった？」

「チガいます！ワタシは」

そこまで言いかけて言い直す事にした。

「あのね、ヨシイ。ウチは、アナタとオホモダチになりたいです。」

ずっとこけた二人にその言葉の意味を教えてくださいなうのだった。

第5話 アキ君と葉月ちゃんとぬいぐるみ(前書き)

感想くださりました、鳴神 ソラ様、LAN武様、まあ様、暮灘雪
夜様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございました。
います。

第5話 アキ君と葉月ちゃんとぬいぐるみ

バカテスト

問・（ ）内に当てはまる人物を答えなさい。
楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業の発展を促したのは（ ）である。

〔姫路瑞希の答え〕

織田信長

〔教師のコメント〕

正解です。

〔吉井明久の答え〕

織田上総介信長

〔教師のコメント〕

君の名前を見た時、×をつけようとした自分を許してください。

〔風宮紅葉の答え〕

第六天魔王

〔教師のコメント〕

本人はそう呼んでたらしいですが、テストの問題にそれを書くのはどうかと。

〔木下秀吉、木下優子の答え〕

尾張の大虚け

「教師のコメント」

……今すぐに本人に謝罪してください。

「島田美波の答え」

ちよんまげ

「教師のコメント」

島田さんが日本語に慣れたのか、些か不安になります。

「全員動くな！」

鉄人先生の一喝で全員が動くのをやめた。

「いいか！カバンを開けて机の上に置け！」

鉄人先生はそう言うてから持ち物点検を開始した。大抵の生徒は軽くカバンを覗くだけだけど、

「坂本。お前はポケットの中を見せる。」

「チツ。」

軽く舌打ちしながらポケットの中身を見せる。生徒に応じてチエツクを厳しくするのは良いの？

「次はお前の番だ。吉井明久。」

今度はアキくんの番か。

「お前はここでジャージに着替える。」

……………いくらなんでもそれは酷いと思う。

「あの、先生。女子の前で着替えるのはちょっと……………」

「ダメだ。お前はズボンの中にまで隠しかねん。今ここでジャージに着替える。……………風宮。お前は携帯を出して何する気だ？」

鉄人先生の言葉を無視して、通話ボタンを押すフリをする。

「もしもし、警察ですか？公衆の面前で生徒にセクハラさせようとする変態教師がいるので来てください。」

「ちょっと待て！わかった！吉井を男子更衣室で着替えさせるからそれは勘弁してくれ！」

必死でボクを説得しようとする鉄人先生に肩をすくめて携帯をしまった。

「小説にゲーム機にDVD。お前は学校をなんだと思っているんだ？」

若干疲れた表情でアキくんの没収した品を袋に積めていく。

「持ち物検査に時間をくったのでHRは省略する。1時間目はいよいよ召喚実習だ。全員体操服に着替えて体育館に集合。」

没収した品を抱えて鉄人先生が教室を出た。

『サモーン試獣召喚！！』

瑞希ちゃんと対戦相手が同時に言い、召喚獣が姿を現した。瑞希ちゃんをデフォルメされた可愛らしい姿だが、その両手に持って両刃の大剣が凶悪だが、点数によって左右されるため、こればかりはどうしようもない。

パシャパシャと写真を撮りまくる康君に疑問を覚えたのか、アキ君が問いかける。

「アレ？ムツツリーニカメラ没収されなかったんだ？」

「ああ。康くんは順番アキくんの後でしょ？だから、更衣室に言ってる間に見られちゃマズイ物は点検を済ませた人に預かってたんだ。」

「ふーん。後で、瑞希ちゃんの写真を焼き増ししてよ。」

「……………（コクリ）……………代金はいらない。」

康くんとアキくんの商談が成立した時、

「吉井明久！島田美波！前に出る！」

お。次はアキくんと美波ちゃんの番だ。

「お。お前の番だぞ。明久。がんばって来いよ。『観察処分者候補』?」

「あのね、それは雄二の方でしょ？僕はそんなに問題行為をした覚えがないよ！」

「……………」

「え？モミジ何気まずそうに目をそらすの!!」

「ゴメン。どう考えてもアキくんの方が『観察処分者候補』だと思う。」

「ヒドイ！モミジは僕の味方だと思ってたのに裏切ったの!？」

ボクにくっついてかかるアキくん に ジト目で応じた。

「……………ボクが何を言っても勉強に意欲を示さない人に何て言っても味方をしると？」

「うっ。」

その言葉にアキくんは言葉に詰まる。

「吉井明久！早く前に出る！」

鉄人先生の言葉に慌てて前に出た。

「あ。吉井が相手だったんだ。嬉しいな」

美波ちゃんが嬉しそうに言った。美波ちゃんアキ君が本当に好きなんだね。

「吉井を殴るの気持ちいいもんね。」

美波ちゃん。殴り合うのは召喚獣だよ。

「あのね、島田さん。僕らが殴り合う訳じゃなくてね。」

「あ。そうよね。ウチらが殴り合わないのよね。」

アキ君の言葉でやっと自分の間違いに気づいたらしい。

「ウチが一方的に殴るのよね。」

……………美波ちゃん。それも違うよ！

「あの、先生。校内暴力ですよ？持ち物検査をしているヒマがありましたらイジメを何とかしてください。」

「……………島田。誰であろうと暴力は良くない。」

「でも、先生。」

「でもじゃない。イジメはダメだ。」

「……………はい。」

ようやくわかってくれたか。

「そうか。わかってくれたか。それなら 今回は特別だからな。」

あれ？校内暴力が容認されたような？

「はい！頑張ります！」

「うん。二人のお仕置きを頑張るから。」

ボクがそう言って美波ちゃんの襟首を、鉄人先生の髪の毛をひっつかむ。

「やっと、終わったよ。」

授業が終わり、いつものメンバーで下校する事になった。

「……………そう言えば、みんなは何か没収されたの？」

「俺は最新のMPをな。クソ。最新の曲が入ってたのに。」

「ワシはないの。明久のおかげで。」

嬉しそうに笑みを浮かべて言う。

「せっかく今日は召喚実習だけで授業がないと思ったのに。」

「アキ君は勉強嫌いだもんね。」

「召喚実習か……………」。

ふと雄二君がぼつりとつぶやいた。

「そうしたの、雄二。」

「いや来年俺たちが試験召喚戦争をやる年になれるなと思ってな。」

「でも、どうして、試験召喚戦争なんてやるのかな？点数の競い合いなら、試験の点数を張り出せばいいのに。」

「たぶん、『モチベーションの上昇』と、『チームワークの向上』でしょ？」

アキ君の疑問に優ちゃんが説明していたとき、

「まったく、吉井ってば。ウチに掃除を押しつけてどこに隠れてるんだか。」

そんな声が廊下から聞こえてきた。

「明久って掃除当番だったの？」

「うん。同じ班の島田さんに任せて逃げて来ちゃった。」

「でも、友達に押しつけるのは良くないよ？ちゃんとあやま……………」

「もう！見つけたら、手足を縛って3階から突き落としてやるんだ」

から！」

それはスタントマンの蒼白物のビックリアクションだよ！

「謝る前に速く逃げて！！」

「言われなくても！！」

ボクという言葉に慌てて逃げ出す。

「あ！見つけた！ちょっと待ちなさい！」

「待たない！殺されるから！」

「怒ってないから待ちなさい！」

それ絶対嘘だと思う。

「……………美波ちゃん？」

ボクのささやきにビクンとふるえた。

「確かに、掃除当番を押しつけたアキ君も悪いけど、アレはないんじゃない？手足を縛って3階から突き落とす？美波ちゃんはアキ君を殺す気？」

ボクという言葉に美波ちゃんは目を泳がせる。

「……………お仕置きだよ。」

もう一度、美波ちゃんの前首を引っ張っていった。

「……………没収品を取り返したいだど？」

「うん。そう。」

美波ちゃんにお仕置きしている間にアキ君は先に帰ってしまった。で、その翌朝みんなの所に集まって開口一番でそう言ったのだ。

「……………理由は？」

「ゴメン。言えない。」

アキ君のその返答に軽いため息を吐いた。

「……………話にならないな。だいたいメリットが少ない代わりにデメリットが大きい。」

「アキ君。その没収品を取り返す事に重要な意味があるの？」

ボクの問いにアキ君は頷いた。

「……………わかった。ただし、事が済んだらボク達に教えて。……………みんなもそれで良いでしょ？」

その問いにみんなが頷いた。

「じゃ、アキ君。ワザと鉄人に没収させるから、携帯のマナーモードを切つて。」

ボクのお願いにアキ君は携帯のマナーモードを解除した。

その後は、原作の通り、出席確認の時に、アキ君の携帯を鳴らさせて、康君に後をつけさせた。

「場所は分かったけど、鍵が掛かっている。」

「あ。それならボクにまつかせなさい。」

指を軽く振って引き受けた。

放課後になってみんなで職員室に来た。

「じゃ、ボクがロッカーを開けるから、みんなは先生達の注意を別の方に引きつけて。」

「では、ワシが先に入って体調不良を装うから、モミジはスキを見て入ってくれんかの？」

そう言つて秀君が入ってしばらくしてから、先生達に支えられて秀君が出てきた。そのスキにボクとアキ君は中に入った。ロッカーを引いてみて鍵が掛かっている事を確認してから、髪に隠したヘアピンを抜いて鍵穴に差し込む。カチャカチャする事数秒、キンという音がして、鍵が外れた。

「お。綺麗にしてある。意外だ。」

確かに、ロッカーは整理されていて没収品は分かりやすい位置に置いてあった。没収袋を肩に担ぎ、ロッカーの上に縛られておいてあった、古本も持って大急ぎで職員室を後にした。

そして、翌朝盗難がバレてボク達が『観察処分者』に認定されてしまった。

「…そういった事情でお金が欲しかったら僕に言えば少しくらい貸したのに。」

その言葉にハッと気づいた表情になった。

「え？じゃ、もしかして僕がやったことって……………」

「ただのムダじゃな。」

シクシクと涙を流すアキ君に軽く頭を撫でるのだった。

第6話 優ちゃんと秀くと振り分け試験（前書き）

感想くださりました、鳴神 ソラ様、LAN武様、まあ様、光闇雪様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

第6話 優ちゃんと秀くと振り分け試験

SIDE 優子

……つまらない。テストを解きながらそう思った。全く解らないからじゃない。アタシが頑張れば頑張るほどアイツが通う事になる教室の距離が広がるからだ。

『行けなくなっちゃった。みんなはがんばって。』

さして残念そうには見えない笑顔で笑う彼の顔を思い出す。

ガタン！

「瑞希ちゃん！」

なにかが倒れる音に続いて明久の声が聞こえた。驚いて、振り返って見ると、瑞希が倒れていて、明久が心配そうにところだった。朝から瑞希の具合が悪そうだった。

「吉井君。席に戻りなさい。」

「ですが、友達を見捨てることはできません。」

「姫路さん。途中退席は0点扱いになります。」

「先生！具合が悪いくらいで0点はいくらなんでも酷すぎます！」

「吉井君は静かにしてください。姫路さん。どうしますか？」

「……………はい。」

「……………じゃ、行こう。瑞希ちゃん。」

その言葉に試験官が慌てた。

「な！待ちなさい！吉井君！」

「悪いですけど先生みたいな人に試験監督されたく有りません！」

そう言っつて明久は瑞希を連れて行っつてしまった。……………もう明久も瑞希もテストを受ける事は出来ない。

『いかなる理由があろうとも、途中退席は0点扱いとなる。』がある以上、明久達が試験を受ける事も出来ない。秀吉もこちらを見た。……………チラリと視線を秀吉に向ける。秀吉もこちらを見た。それだけで、弟が何を言いたいか、手に取るように分かつてしまった。

S I D E 秀吉

ガタン！

「瑞希ちゃん！」

なにかが倒れる音に続いて明久の声が聞こえたのじゃ。振り返って見ると、瑞希が倒れていて、明久が心配そうにそばにいたのじゃが、その後の流れで明久は瑞希を連れて行っつてしまったのじゃ。明久がこの試験の為にどれだけ一生懸命に勉強してきたかを知っておる。それなのに全部ムダにしてもうた。みなが愚かをつけたくなる程の優しさ。それが明久の長所であり短所でもある。そして、ワ

シが明久を大好きな理由でもある。like^{友情}などではなくlove^{愛情}のほうじゃ。ふと、姉上の方を見る。姉上もこちらに視線を向けていた。そして、倒れた演技をする姉上を保健室まで連れて行った。

第7話 ボクとアキくん達と試験結果（前書き）

感想くださりました、鳴神 ソラ様、光闇雪 様、LAN武様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

やっと原作開始です。

それと、今回、ワザとの誤字があります。

第7話 ボクとアキくん達と試験結果

バカテスト

問・以下の問いに答えなさい。

調理のために火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。
この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。

〔姫路瑞希の答え〕

問題点

マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため、危険であるという点

合金の例

ジュラルミンと言いたいですが、料理するたびに腐食しますので、ステンレス

〔教師のコメント〕

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

〔土屋康太の答え〕

問題点

ガス代を払っていなかったこと

〔教師のコメント〕
そこは問題じゃありません。

〔吉井明久の答え〕
問題点

昔見たテレビ通りでしたら、マグネシウムを空气中で燃やすと、激しく発光してきわめて危険です。

合金の例
ジュラルミン

〔教師のコメント〕
正解かどうかはともかく、もっと自信を持ってください。そして、吉井君。去年と比べて成長しましたね。

〔風宮紅葉の答え〕
問題点

酸化マグネシウムの生成の際、激しく発光してしまう。その際、水をかけると、余計大惨事になる。

合金の例 オレイカルコス
〔教師のコメント〕
テストに伝説の合金を持ち出さないでください。そんな事するのは君ぐらい……

〔木下優子、木下秀吉の答え〕
問題点

マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため、危険である合金の例 ヒヒイロカネ

〔教師のコメント〕
と思いましたが、まさか君たちもするとは思いませんでした。し

かし、一字一句違えないとは、さすが姉弟ですね。

ブンブンと天狼を素振りする音で目を覚ました。時計でまだ6時になっていない事を確認して、朝食を作る。朝食は焼いた鮭とご飯とおみそ汁。

出来たので父さん達を起こして、食べてからアキ君の家へと向かう。

アキ君の家の呼び鈴を鳴らしてみるが、何の反応も無い。仕方ないので鍵を取り出して開ける。何故鍵を持っているかというと、明信さん、アキ君のお父さんに世話するように（とくに金銭面）頼まれたのだ。どうやら、アキ君にお金を渡しておく、ゲームにつき込むと考えたらしい。実際にそれは正しい。試しに一週間の食費を渡してみたら一日でゲーム代に消えてしまった。

アキ君の部屋に行ってみるとやっぱりまだ寝ている。

「……………おい。アキ君。起きろ。」

そう言っても効果がない。それどころか

「うーん後おゝ2万光年。」

と寝ぼけた声でそう返答を返した。オマケに光年は時間じゃなくて、距離だし。……………仕方ない。軽くため息をついて冷蔵庫からある物を取り出す。

「アキ君。早く起きないと冬美お婆ちゃんの手作りジュースをプレゼントするよ?。」

「起きた！起きたからそれはやめて！」

ボクの囁きにアキ君は慌てて起き上がる。

「おはよ。アキ君。」

「おはよじゃないよ！それは止めてっていつも言ってるじゃん！」

「何言ってるんだよ？最初は揺すってあげたのに起きない方が問題じゃないか？」

ボクの反論にアキ君は何も言えなかったらしい。

「早く着替えなよ。朝ご飯はボクが作るから。」

ひらひらとサクラ舞う道を眺めながら、今日からふみつきがくえん文月学園の2年生だと、感慨深くいつものみんなで歩いていると、校門に仁王立ちしている鉄人先生に気づいて声をかけた。

「てつ………西村先生。おはようございます。」

「西村先生おはようございます。」

「西村先生おはようなのじゃ。」

「二十八号先生。おはようございます。」

「吉井。お前は鉄人と言いかけなかったか？」

「気のせいですよ。」

「ん？そうか？」

ジロリとにらみながら問いかけてきた。

「そして、風宮。俺の名前は西村 宗一であって二十八号ではない。」

「ええ！鉄人のフルネームって鉄人 二十八号じゃなかったの！！」

「お前は新田でも知っている事も知らんのか！？

…………… まあいいほら。」

やや憑かれたような表情で自分達の名前の書かれている封筒を差し出す。まあ、ボクは開けなくても分かっているので、鞆の中にしまつ。

「風宮。残念だったな。」

「こづいうのも時の運ですし、仕方ないですよ。」

…………… 実は、振り分け試験の前日に、冬美お婆ちゃんに無理矢理稽古をつけさせられたのだ。そして、その結果、両手両足肋骨3本骨折、全身打撲の全治2週間の重傷だったのだ。お医者さんもよくコレで生きてたと呆れられたんだよね。

アキ君達が封筒を破ったので見て見ると、Fと書かれていた。

「アレ？みんなFクラスなの？なんで？」

思わず問いかけた。みんなの学力なら、Aクラスに行けるだろうし、と首をかしげていると、瑞希ちゃんから答えてくれた。

「試験中に熱を出しちゃいました。」

「で、その瑞希ちゃんを保険室まで連れて行って0点。」

「で、アタシは体調不良で倒れたの。」

「そして、ワシはその姉上を保健室まで連れていくために退室したのじゃ。」

「姫路と吉井はともかく木下姉弟はワザとだろ？1つの教室で2人の人間が体調を崩すなど考えにくいからな。」

ジロリと2人を見ながら問いかけた。

「もう過ぎた事ですししょうがないですよ。」

「そうじゃのう。」

「まあ。2人の気持ちは分かるがな。」

その一言に2人の顔は紅くなる。ああ。そう言う事か。アキ君を追いかけてFクラスに来たのか。

「まあ、わざわざFクラスに来たんだ。持つべき物は友情だよな。ありがとう。」

その言葉に何故か優ちゃんにため息を吐かれてしまった。意味が分からず、首をかしげていると

「まあ、いい。以後気をつけるように。それと、吉井。俺個人の意見だが、振り分け試験の時お前の行動は正しい。お前が俺の教え子だった事を俺は誇りに思う。」

「「「はい!」「」」

西村先生の言葉に3人は力強く返事をする。

「分かったなら行け。」

3人の返事に微笑を浮かべていった。

Trick or Treat (お菓子頂戴。じゃなきやイタズラするよ。)

ワイト「(本日がハロウィンというわけで前書き、あとがきに私達が出ることになりました。感想くださりました、鳴神 ソラ様、光 闇雪 様、LAN武様、まあ様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。)

ワイトメア「(このお話が読んでくださる皆様の楽しみになれば幸いです。では、本編をどうぞ。)

Trick or Treat（お菓子頂戴。じゃなきやイタズラするよ。）

SIDE 翔子

「……………？雄二？」

私が雄二と一緒に帰りたくてFクラスに来た時、雄二は寝ていた。私が入って来たのに起きる気配はない。熟睡しているらしい。

「…雄二。起きて。」

声をかけたり、揺すってみても、起きようとしなない。仕方ないので、起きるまで待っていたのだが、ふとしたイタズラを思いついた。『あること』をしてから雄二の耳元で囁いた。

「…雄二。」

Trick or Treat（お菓子頂戴。じゃなきやイタズラするよ。）
「.」

「ん……………」

「…残念。Trick。」

そう言うってから雄二に近づいて……………。

「ん…………。」

目を開けた視界に翔子が映る。それは、いいんだが、何故顔が紅い？

「翔子。どうした？」

「なんでもない。雄二。一緒に帰ろう。」

気にはなるがまあいいか。翔子と一緒に教室を出ると、明久と風宮に出会った。

その2人は俺を見るとニヤニヤと笑っていた。

「どうした？」

「イヤ。何でもないよ？ただ、大胆だね。雄二？」

俺の問いにますます笑みを強くして言った。

「雄二君。コレだよ。」

と言って頬の写真を見せた。って何！

「翔子！」

頬に口紅がついていた。ちくしょう！こんなものを新田達に見られたら、

「風宮さんどうしたんですか？」

ちよつとそこに新田がいた。一通り俺達を見て、視線が俺の頬にとまる。

「緊急召集！」

その叫びにFFF団が集合する。慌てて、この場から離脱する。

「者共！坂本を追え！！！！異端者だ！！！！！」

ちくしょう！捕まっつてたまるか！！

「不幸だあーっ！！！！！」

俺の叫びが文月学園に木霊した。

Trick or Treat (お菓子頂戴。じゃなきやイタズラするよ。)

ワイト婦人「(ハロウィンとは魔女やお化けの仮装して、お菓子をもらう行事じゃ。)」

ワイトキング「(ヨーロッパが起源の民族行事のようじゃ。簡単に言えば、日本のお盆のようなものじゃ。死者の魂とともに魔物までやってくるらしいから、それから、守るために魔物の姿をするようになったらしいのう。)」

ワイトメア「(では、皆様で、)」

骨ズ「(Trick or Treat (お菓子頂戴。じゃないとイタズラするよ)!!)」

Trick or Treat ZWEI (お菓子頂戴。じやなきやイタズラオ

ワイトメア」(新話を投稿致します。このお話は紅葉君のご両親のお話でございます。

え？ハロウインは終わりじゃないの？残念ながら、それは違います。
」

ワイト」(感想くださりました、LAN武様、鳴神 ソラ様、光闇雪様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございました。
」

今話が皆様の楽しみになれば幸いです。
」

Trick or Treat ZWEI（お菓子頂戴。じゃなきやイタズラオ

Side 忍

縁側に座ってお菓子を食べているところで、

「お兄ちゃんーん」

と声を上げながら、秋穂が突撃してきた。その衣装は、いつもの、着物姿ではなく、かわいらしい魔女のものだった。

「夏実ちゃんに作ってもらったんだ 似合ってますよ？」

そのすぐ後ろで秋穂とパールツクの夏実がやってきた。

「いくよ。夏実ちゃん せーの」

「Trick or Treat（お菓子頂戴。じゃなきやいたずらしちゃうよ。）」「」

二人が声をそろえて手を差し出した。……ああ。そうか。今日はハロウィンだっけ。だけど、ここは和菓子屋だからいくらでも、お菓子はあるんだが。あ、そうだ。ふと、思いついたことがあり、口の中に、和菓子を運び、良く噛む。そして、夏実の手を取り、こちらに引き寄せる。

「キヤッ」

その夏実は嫌がるそぶりを見せず、むしろ、嬉々とした表情で、こちらに近づく。そして、そのかわいらしい唇を重ねた。

「ん（ハート）んう…ん…（ハート）」

その、口の中に和菓子を流し込んでゆく。

しばらくしてから夏実の唇を放す。その眼はトロンとして上気していた。

「夏実。Treat《お菓子》はおいしかった？」

「…うん。甘くて、忍の味がして、とても美味しい。」

その横で、秋穂がふくれっ面をしている。しかし、すぐに笑みを浮かべる。

「私はもらってないから、イタズラTrickする」

そう言うってから、ボクのお菓子を手にとって、口の中でよく噛んで、口移しで、ボクの口の中に流し込んだ。お菓子を流し終わってから、ボクの唇を解放する。

「エへへ 私の^{イタズラ}Trickは美味しかった？」

「ウン 甘くて、秋穂の味がして美味しい。」

S i d e ? ? ?

(開店前に何Loveってるの!!)

3人の雰囲気を見て、叫びたいがそれができない従業員一同だった。

Trick or Treat ZWEI (お菓子頂戴。じゃなきやイタズラオ

ワイト婦人」(ハロウィンとは10月31日から11月2日じゃ。)
「

ワイトキング」(10月31日は前夜祭。つまりハロウィンイブの
ようなものらしいのう。)

ワイト」(では、皆様でいい)

骨ズ」(Trick or Treat)お菓子を頂戴。じゃなき
やから、イタズラするよ。(!!)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5823w/>

ボクと皆のバカテス日常

2011年11月1日02時18分発行